

第三十二回 日蓮宗教学研究会発表大会紀要

「本未有善」について

高橋 俊 隆

聖人が末法下種を主張された根拠に不輕品の受容があり、本未有善という機根論が存することは周知のとおりである。本未有善の出典は『法華文句』不輕品釈にある。即ち、釈尊四十余年の対機說法と不輕の法華直説における化導の相違を本已有善と本未有善の機根論にて説明されたものである。従ってこの相違は善が己有か未有かに峻別されるのであるから善の解釈がポイントになる。

古来、善を法華開法と解し、開法下種を根拠に本已有善の機は具仏種、本未有善の機は末下種・仏種を具有せずとされている。この理由は不輕の折伏行に存し妙樂が因謗得益の譬をもって逆縁成仏を説くところにある。又『曾谷入道殿御返事』には本已有善を仏種を具有する者とし爾前得脱の許容を三五下種に認め、これに対し本未

有善の末世衆生は仏種を具有しないとして不輕繼承の折伏下種の必要性を述べている。即ち、善とは仏種と同義語で仏種の具不己有と未有の区別を受容されていたことが確認できる。ただし、ここで問題となるのは釈尊と我等の根源的関係の存否である。つまり、我等が仏種を具有しないのは仏からの救済が未だになかったのか（未下種）、あるいは我等が仏の救済を無視していたのか（不信謗法）ということである。更に、『法華取要抄』に「此土我等衆生五百塵点劫已來教主釈尊愛子也。依不孝失子今雖不覺知不可似他方衆生。有縁仏与結縁衆生譬如天月浮清水」と叙述された理由は奈辺に存するのであろうか。

聖人の釈尊親徳観は父種を重視し妙法五字を媒介とした下種・結縁に衆生との父子関係を受容されたものと思う。この理由は妙樂が「結縁如生成熟如養。生養縁異父子不成」として天台の「父子義」を扶釈した文にある。『法華取要抄』の叙述は、この天台・妙樂の文を集成とし迹門「三」の因位に於ても釈尊は一切衆生と結縁的関

係にあると認識され、しかも本門「五」の顕本觀を契機に末世衆生に於ても無始久遠いらひ釈尊とは父子關係にあるとみられ、この關係の存する根拠を結縁に求めて釈尊を有縁の仏と規定された叙述である。このように理解される前提には釈尊と我等の間に何等かの交渉が成立されていなければならない。それは久遠下種ではなからうか。

もし、本末有善を釈尊とは全く無縁の衆生であると解釈すれば、弥陀等の諸仏と釈尊の因位果位を比較して釈尊の此土有縁的超勝を強調し、釈尊の化導を重視された意義が希薄になり、『法華取要抄』に結縁を媒介とした有縁の仏と衆生であるという叙述はされなと思う。更に、寿命品は末法正意と把握され、遣使還告の文に師自覺をされた現実性は寿命品の世界が末法に反映され被救済者である失本心子を末世の我等と指摘するものと思う。妙樂は失本心を「忘本所受故曰失心。從本化來迷真之後起無明惑如飲毒藥。背大化為失心」と述べ、聖人は失本心子を「不孝子」と解釈し『法華取要抄』に釈尊と我等は久遠來、父子の有縁の關係にありながら過去の釈尊違背および退大取小の不孝の失により今に覺知できないのが現状であると述べたものと思う。

又、聖人が注目された經文に譬喩品の「若人信毀謗此經則斷一切世間仏種」の文と勸発品の「於如来滅後闍浮提内広令流布使不斷絶」の文がある。前者は法華不信||謗法||斷仏種の連関性を説き、後者は末法における正法復帰を遺誠されたものである。そして、両者を収束するのが普賢經の「汝行大乘不斷仏種」の文である。即ち仏種の相続を重視した末法下維論に連関するのである。

以上のことから知られることは、末世衆生も本来、久種を被った衆生であるという受容が聖人の思想中に看取でき、釈尊からみれば悉是吾子とて愛子には違いない。ただし、これは仏の立場からみた解釈である。従つて己有・未有の区別は衆生側における仏果獲得の行動に規定される一面をもつと思う。つまり、本末有善とは譬喩品に指摘された法華不信による仏種喪失の衆生をさすのであり、具体的には仏に直接的に働きかけて仏種を結実すべき行動がなかったと解釈する衆生側の信行論を主体に己有と未有の区別が規定されたとも理解できる。この場合の善とは発心修行に譲与された仏種に外ならない。仏意からすれば決して未下種の者ではなく、その救済を無視し覺知せず三三五の塵点を遍歴してきた者が本末有善の衆生であると思う。

『開目抄』等に寿命品を知らざれば久遠の仏・久遠の父を知らず、又、子の子たることを覚知できない不知恩・不孝の子であると述べた一連の叙述は、寿命品の世界に釈尊と我等の根源的有縁性、即ち父子關係が存する所以をみられたからであり、釈尊は親父・慈父であるとして親徳を標榜されて帰敬された理由がここに存したのである。

日蓮聖人遺文引用説話の一考察

——安心の側面より——

西 片 元 證

以前、二・三の考察により成仏への唯一の直道たる行に即して、安心が存在することを考えてみた。日蓮聖人（以下、聖人と略記）に於いてその行は理想的人間の行動規範を示唆するものであり、逆にその行動規範にはずれる行為は安心とは結びつかないものであった。この聖人の示した行法は妙法五字の受持に集約され、さらに四威儀に通ずるものと考えられる。本稿では説話を素材と

して、受持を具体的に捉え、受持における成仏の確実性、そして、理想的人間の規範を確認してみたい。さて、聖人の説話引用は一種の話でも種々の角度より活用され、異なる論旨を持つ場合もある。故に、使用意図による分類・整理を経て考察せねばなるまい。

分類・整理には種々の方法を想定できようが、ここでは(A)法華經至上主義に立脚した倫理観、(B)法華經・法華經に帰依することの功德、(C)法華經等の色説に関すること、としたい。すなわち、(A)の法華經至上主義に立脚した倫理観の項で理想的人間の規範を求め、さらに全体を通し、特に(C)の法華經等色説に関する項を中心として成仏の確実性を考えてみたい。

(A) 法華經至上主義に立脚した倫理観

ここでは親子關係を語ったものとして、淨藏・淨眼と妙莊嚴王、目連とその母、烏龍・遺龍等の話が挙げられる。主従關係については阿闍世王と耆婆大臣、紂王と比干等の話があり、師弟關係では尹伊と堯王、務成と舜王、大公望と文王、老子と孔子について述べられている。又兄弟關係は、淨藏・淨眼、釈尊と提婆達多が前世では摩訶羅王の善友・悪友の二太子であった話がある。夫婦關係にても陳子・相思樹・松浦佐与姫・蘇武等の話を引き